

Title	文化資本概念の現代的展開：新興文化資本をめぐって
Sub Title	Contemporary development of the concept of cultural capital : on the position of emerging cultural capital
Author	村井, 重樹(Murai, Shigeki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2022
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.93 (2022.) ,p.[1]- 14
JaLC DOI	
Abstract	<p>Cultural capital is one of the most important concepts in Bourdieu's sociological theory along with habitus and field. It plays a key role in his analysis of cultural distinction and inequality. There are also many sociological studies using the concept of cultural capital. In this paper, I examine Bourdieu's concept of cultural capital in terms of contemporary social and cultural conditions and reconsider its sociological scope, taking the perspective of emerging cultural capital into account. Bourdieu considers cultural capital a relational concept; however, his Distinction also adopts absolute standards, namely, the cultural legitimacy based on the rarity and the distance from necessity. This legitimacy becomes the symbolic boundary between highbrow and popular culture, and cultural distinction works through it. However, Peterson's cultural omnivore thesis and Lamont's study of boundary work in the 1990s have led to reconsidering this form of cultural distinction.</p> <p>In recent years, several studies in post-Bourdieuian cultural sociology have also focused on emerging forms of cultural capital. These studies argue that the rise of crossover taste does not mean the erosion of cultural distinction. Rather, they claim that class inequalities in cultural consumption persist and two emerging forms of cultural capital, i.e., "cosmopolitan taste" and "knowing mode of appropriation of culture" are the key to understanding cultural distinction today. Particularly, these new forms of cultural distinctions are found in the younger age groups, and these are associated with contemporary cultural conditions.</p>
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000093-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

文化資本概念の現代的展開

——新興文化資本をめぐって

Contemporary Development of the Concept of Cultural Capital: On the Position of Emerging Cultural Capital

村 井 重 樹*

Shigeki Murai

Cultural capital is one of the most important concepts in Bourdieu's sociological theory along with habitus and field. It plays a key role in his analysis of cultural distinction and inequality. There are also many sociological studies using the concept of cultural capital. In this paper, I examine Bourdieu's concept of cultural capital in terms of contemporary social and cultural conditions and reconsider its sociological scope, taking the perspective of emerging cultural capital into account.

Bourdieu considers cultural capital a relational concept; however, his *Distinction* also adopts absolute standards, namely, the cultural legitimacy based on the rarity and the distance from necessity. This legitimacy becomes the symbolic boundary between highbrow and popular culture, and cultural distinction works through it. However, Peterson's cultural omnivore thesis and Lamont's study of boundary work in the 1990s have led to reconsidering this form of cultural distinction.

In recent years, several studies in post-Bourdieuian cultural sociology have also focused on emerging forms of cultural capital. These studies argue that the rise of crossover taste does not mean the erosion of cultural distinction. Rather, they claim that class inequalities in cultural consumption persist and two emerging forms of cultural capital, i.e., "cosmopolitan taste" and "knowing mode of appropriation of culture" are the key to understanding cultural distinction today. Particularly, these new forms of cultural distinctions are found in the younger age groups, and these are associated with contemporary cultural conditions.

Key words : Bourdieu, Cultural Capital, Emerging Cultural Capital, Cosmopolitan, Knowingness

1. はじめに

本稿は、P・ブルデューが提起した文化資本概念を、現代の社会的・文化的条件を踏まえながら考察することにより、その社会学的分析の射程について再検討しようと試みるものである。

文化資本 (capital culturel) は、ハビトゥス (habitus) や場 (champ) と並んで、ブルデュー社会学理

* 島根県立大学地域政策学部

論における重要概念の一つであり、とりわけ文化的実践をめぐる人びとの卓越化の問題、そしてそれらを通じた文化的不平等の再生産について分析する際に大きな効力を発揮してきたということが出来る。こうした文化資本の果たす社会的働きに着目した社会学的研究は、ブルデュー社会学の登場以降、数限りなく提出されてきたし、現在も提出され続けている。この意味で、文化資本概念は、社会学、とりわけ文化社会学や教育社会学において、すでに一定の地歩を得た概念であるといってしまうと間違いない。

しかし同時に、文化資本概念は、ブルデューによって多義的に用いられてきたこともあり、その意味内容が幅広く捉えられ、言及する論者に依じて異なる側面が強調されてきたと考えられる。この点、ブルデューの文化資本概念は、社会学的研究の中に深く浸透してきた一方で、常に曖昧さを内包してきたということもできる。

くわえて、ブルデューが1960年代に文化資本概念を提出して以来、さまざまな形態で進められてきた文化的実践に関する理論的・経験的研究の成果が、この概念の現代社会における妥当性をめぐって多様な議論を巻き起こしてきた。文化資本は現代社会分析においても有効な概念であるのか、ブルデューがこの概念を導入した文化的背景と、それを基にして描き出した社会的世界の姿は、現代社会においても同様に当てはまるのか、そして、もしそれが妥当する場合、ブルデューが想定していた社会的・文化的条件と現代社会のそれとのあいだにある差異は、文化資本概念にどのような再考を迫ることになるのか。いずれにしても、文化資本概念は、こうした問いとともに、絶えず社会学的研究の争点を構成し続けてきた。

本稿は、以下のように議論を進めていく。まず、『ディスタンクシオン』での議論を念頭に置きながら、ブルデュー社会学における文化資本概念の基本的視点を確認する。次に、ブルデュー社会学で提起された文化資本概念の妥当性に関して再考を導く契機となった文化的オムニボア論の含意について簡潔に考察する。そして、文化的オムニボア論の問題提起を経て、欧米のポスト・ブルデューの文化社会学で近年展開されている新興文化資本に関する議論を整理したあと、最後に、現代社会における文化資本概念の課題と展望について検討する。

2. ブルデューの文化資本概念

2.1. 文化資本とは何か

ブルデューは、自らの社会学的研究に文化資本概念を導入するにいたった経緯と理由について、こう述べている。「『学歴における成功』を手にするために、さまざまな社会階級出身の子どもたちが学校で発揮する力能に不均等があることを、どう考えたらよいのか。すなわち学歴市場において、さまざまな階級や階級内集団に属する子どもたちが、それらの階級や階級内集団のあいだでなされる文化資本の分配に際して、獲得することのできる特定の利益について考察するためである」(Bourdieu 1979b: 3=1986: 18-19)。

ブルデューによれば、経済主義的な見方¹⁾は、学歴への投資を勉強費用などの金銭的収益の問題のみに還元して、教育投資の重大な社会的決定要因を捉え損ねることになる。それは、「学歴投資の戦略を、教育にかかわる戦略全体のなかに、そしてまた再生産戦略のシステムのなかに位置づけなおして考察しない」ために、「家庭内における文化資本の伝達」を見逃し、「能力」や「才能」が時間と文化資本における投資の産物であることを忘れてしまう。したがって、そこでは、「教育システムが文化資本の世襲的伝達を承認することによって社会構造の再生産にもたらす寄与」が無視されるのである (Bourdieu

1979b: 3=1986: 19-20)。このようにブルデューは、経済主義およびそこで前提とされる生得的な能力観と対比しながら、文化資本概念が要請された背景を説明している²⁾。

こうして1960年代に発表された学生たちの学校における成功と失敗に関する一連の教育社会学的研究のなかで打ち出された文化資本概念とそれをを用いた分析が教育システムから社会全体へと拡張されるのは、フランスで1979年に刊行された『ディスタンクシオン』においてである (Priour et al. 2008: 48)。ブルデューは、この著書のなかで、とりわけ人びとの所有する経済資本／文化資本の総量と構成に着目することで、社会階級的位置に応じて文化的実践が差異化する様相を鮮明に描き出している。しかしながら、『ディスタンクシオン』では、文化資本は重要な鍵概念の一つになっているけれども、そこには形式的な概念定義が何ら含まれていないと指摘されている (Priour and Savage 2013: 248)。

それゆえ、文化資本によってブルデューが意味するところを概念的に把握するためにしばしば参照されてきたのが、『ディスタンクシオン』と同じ1979年に発表された論文「文化資本の三つの姿」(Bourdieu 1979b=1986)である。この短い論文のなかで、ブルデューは文化資本概念を次の三つの観点から特徴づけている。すなわち、①身体化された様態 (état incorporé)、②客体化された様態 (état objectif)、③制度化された様態 (état institutionnalisé) である。この論文にもとづいて、それぞれの要点を示せば、以下ようになる。

まず、身体化された文化資本は、文化資本の特性の大部分を構成するものであり、この概念にとって持続的な身体化とその蓄積の時間が重要な意味をもつことが示されている。行為者は、無意識的にはあるものの、多くの時間を費やすことで、その獲得の原初的な諸条件によって与えられた刻印を自らの身体に蓄積し保持することになる。ブルデューがハビトゥスと言い換えもするこうした文化資本の特性は、資本の相続としては不可視化され、経済資本よりも高度に隠蔽された形態を取るぶんいっそう強力な効果を発揮する。強力な文化資本の保持者は、その配分構造における自らの位置の希少性を介して卓越化することで、物質的・象徴的利益の獲得が保証される。

次に、客体化された文化資本は、絵画、書物、辞典、道具、機械などの文化財の形態を取る。これらは、経済資本と同様に、物質として継承することが可能であり、その獲得には経済資本が前提とされる。しかし、客体化された文化資本の特性のいくつかは、身体化された形式をとる文化資本との関係において決定される。なぜならそれは、物質的な獲得の対象であるだけでなく、象徴的な獲得の対象でもあるからだ。この客体化された文化資本は、身体的に領有できる限りで、物質的にも象徴的にも資本として機能し、行為者は、それを闘争における武器や賭け金として投企することで利益を手にすることができる。

最後に、制度化された文化資本は、資格という形式への客体化を伴う。これは、集合的魔術 (magie collective) によって文化資本を制度として確定するものであり、学歴資格によって代表される。学歴資格は、その保持者たちに法的に保証された価値を授け、彼らの文化的能力を恒常的に証明する。またそれは、それを所持する者たちと所持しない者たちとのあいだに境界線を設けて差異を生みだし、集団を制度的に確定する。したがって、制度化された文化資本は、制度的承認を必要とするためにその保持者に対して高い自律性をもち、身体化された文化資本に見られる生物学的な限界を中和するやり方のひとつになる。もちろん、これによって得られる人びとの物質的・象徴的利益もまた、その資格の希少性に依存する。

このようにブルデューは、経済資本概念との差異化を図りながら、文化資本概念を三つの様態に区別

し整理している。かかる文化資本概念の整理は、『ディスタンクシオン』においても同様に踏まえられており、この概念的な把握の仕方を背景に、それぞれの議論の文脈のなかで文化資本が具体化され、その内実が示されていくのである。

2.2. 絶対的文化資本と相対的文化資本

ブルデューが文化資本を抽象的な水準で定義するに留まり、その具体的内容を一義的に規定していないのは、それが場の概念と結びつけられ、関係的な概念として理解されているからである。ブルデューによれば、場の観点から考えることは、関係論的に考えることであり、場は位置のあいだの客観的諸関係のネットワークあるいは布置構造として定義される (Bourdieu and Wacquant 1992=2007: 130-131)。こうした場において行為者は、その歴史的な産物である固有の賭け金をめぐって、自ら所有する各種の資本を元手に争い合うのであるが、その資本の価値自体は、場の歴史的・社会的条件に応じて変化するため、理論的には場に相対的なものになる。しかし一方で、ブルデューは、彼の社会分析において基本となる三種類の資本を想定している。それは、経済資本、文化資本、社会関係資本 (social capital) の三種類の資本であり、さらにこれらのいずれもが取りうるべきとされる象徴資本がそこにつけ加えられる (Bourdieu 1986; Bourdieu and Wacquant 1992=2007: 156)。すなわち、ブルデューの実践のエコノミーの分析では、多様な形態の資本が認められているものの、これらの数種の資本に格別の地位が与えられているといえる。そして、これらの資本のなかで、ブルデューが社会学者としてとりわけ重視してきたのが文化資本である³⁾。

ところが、文化資本概念は、理論的にはこのように把握されているけれども、『ディスタンクシオン』に目を向ければ、そこでは文化資本の多寡を判断するための一つの指針が示されている。A・プリウールらによれば、それは、「より絶対的な基準となる要素」であり、文化資本概念は、ある程度までI・カントの「純粹趣味」概念の刻印を帯びている (Prieur et al. 2008: 50)。ブルデューは、実践のあらゆる美学や美学化の基本として「機能に対する形式の優越」(Bourdieu 1979a: 197=1990 I: 270)あるいは「実質または機能と形式などの対立」(Bourdieu 1979a: 218=1990 I: 300)を置き、ここから文化資本の豊かな層と文化資本の乏しい層とのあいだにある美的判断の差異を導き出す。たとえば、前者の層は、芸術作品に対して、形式上の探求や無私の態度を示し、後者の層は、道徳や楽しみといった規範への参照を表明するのである。そして、こうした美的判断の差異は、絵画、写真、映画、演劇、音楽、食事、スポーツなどのさまざまな文化的領域において文化資本の多寡を示すものと捉えられ、それが象徴的利益の獲得を左右することになる。

芸術作品の所有化は、(一見、先天的に与えられているかにみえながら)誰にでも与えられているわけではない性向や能力を前提としているので、物質的なものであれ象徴的なものであれ、どうしても排他的所有化となる。芸術作品は(客体化されたあるいは身体化された)文化資本として機能しつつ、二つの利益を保証するのである。すなわちひとつは卓越化利益であり、これはその芸術作品を所有化するのに必要な手段が入手しにくいものであればあるほど大きくなる。またもうひとつは正統性の利益であり、これは特に、自分が(いまある通りのしかたで)存在し、あるべき姿でいることを正当化されているのだと感じるところに生じる利益である。(Bourdieu 1979a: 252=1990 I: 349)

このように文化資本は、希少かつ正統的であればあるほど、他者からの卓越化を図り、自らを正当化するのに貢献する。ブルデューによれば、文化資本の蓄積条件は、「経済的必要性の外側へいわば隠遁するという代償」を支払うことであり、かかる経済的必要性への距離が、芸術作品に対して、性質や機能といった日常的利害を括弧に入れ、「無私」や「無償」の態度を表すようなブルジョワの経験を生みだす (Bourdieu 1979a: 56-7=1990 I: 83-85)。こうした経済的必要性から解放された美的性向は「自由趣味」と呼ばれ、日常生活の通俗的必要性に迫られた「必要趣味」と対置される。それゆえ、T・ベネットらが指摘するように、「ブルデューにとって、適切な文化資本の形態を保持していることを示すサインは、正統文化の運用能力とカント美学の会得だった」ということができる (Bennett et al. 2009=2017: 468)。そして、この文化的正統性の序列が文化資本の多寡を示す一つの基準となり、社会階級の序列と対応するものとして把握される。

文化消費に関しては、主要な対立はここでは次の二つの消費のあいだに現われてくる。ひとつは経済資本の点でも文化資本の点でも最も恵まれた階層の消費であり、これはその希少性そのものによって卓越化したものとして示される。もうひとつは経済資本の点でも文化資本の点でも最も恵まれない人びとの消費であり、これは安易であると同時に月並みであるがゆえに、社会的には通俗的とみなされているものである。そして両者のあいだの中間的部分に、自分の抱いている野望と実際に可能なこととのあいだにギャップがあるために、その不一致が反映して必ず上昇志向をもったものとして現われる実践が位置づけられることになる。(Bourdieu 1979a: 196=1990 I: 269)

かくして文化消費の境界は、経済的必要性への距離と希少性に支えられたハイブラウな正統文化（自由趣味）と、それを否定する通俗文化（必要趣味）とのあいだに引かれることになる。そしてそれが社会空間（社会階級的位置）と相同的関係を取り結ぶと同時に、そうした文化的境界を基盤として、それぞれの階級集団間もしくは階級内集団間で卓越化が繰り返されるのである。したがって、ブルデューは、文化資本概念を場に相対的なものとして定義する一方、その絶対的な基準を提示しており、前者を相対的文化資本、後者を絶対的文化資本と呼ぶことができる (Priour et al. 2008; Priour and Savage 2011, 2013)。

3. 文化的オムニボア論の台頭

『ディスタンクション』で提示された、以上のような絶対的文化資本の妥当性は、その後の文化的実践と社会階級との結びつきを考察する社会学的研究において、理論的にも経験的にも重大な争点を構成し続けてきた。文化的な希少性と正統性を体現するハイカルチャー (high culture)・ハイブラウ文化 (highbrow culture)・古典文化 (classical culture) と社会階級との親和性を媒介にした文化的卓越化モデルは、現代社会の文化的実践の分析に際して、どれほどの有効性を発揮しうなのか。

こうしたブルデューの文化的卓越化モデルに対して、経験的検証を通じた鮮やかな問題提起を行い、そのモデルの再検討を促す契機を形成したのが文化的オムニボア論である。文化的オムニボア論とは、R・ピーターソンによるアメリカ社会における音楽趣味の研究 (Peterson 1992; Peterson and Simkus 1992) を嚆矢として経験的検証が進められてきた文化的実践に関する一連の研究のことである (村井 2012: 92)。そして、これらの研究のなかで提出された文化的オムニボアという見方は、その後、ブル

デューの文化的卓越化モデルの妥当性を考察するにあたって無視できない重要な地位を獲得し、音楽以外の多様な文化領域にも適用されていくことになる。

ここで「文化的オムニボア (cultural omnivore)」とは、特定のジャンルに嗜好や活動を制限することなく、あらゆるジャンルにわたって雑食的に文化を消費し実践する人びとのことを指す。ブルデューの場合、文化資本の豊かな層は、それに対応する正統な文化ジャンルを排他的に選好し実践することで、他者からの卓越化を図ると同時に象徴的利益を獲得し、それが支配関係の再生産に結びついていくとされる。しかし、文化的オムニボアは、そうした文化的序列に応じた象徴的境界を侵犯し、ハイカルチャーからポピュラー文化にいたるまでの幅広い嗜好をもつだけでなく、その存在がエリート層との結びつきを示しているという点で、ブルデューの文化資本概念に基づく文化的卓越化モデルに異議を唱えたといえるのである (村井 2010)。

この点に関して、後にピーターソンは、ブルデューが提出した知見と比較しながら、1990年代における自らの文化的オムニボア研究の成果を次のように整理している (Peterson 2005: 259-260)。1982年のアメリカ合衆国国勢調査局のデータに基づけば、職業的地位の高い人びとは、ファインアート (fine arts) への好みを表すと同時にファインアートの活動に参加する傾向がもっとも高く、ブルデューの知見と同様に、高学歴・高収入・大都市居住といった属性を有している。しかし、これらの高地位層は、その他の層よりも低地位の活動に幅広く参加する傾向が高かったのに対し、職業的地位の低い人びとは文化活動の幅の制約がもっとも大きかった。すなわち、アメリカの高地位層の多くにとって文化資本は、ファインアートだけでなく、大衆的・民衆的表現をも含む、幅広い文化形態の卓越した美学 (distinctive aesthetic) を評価する能力として理解される。したがって、高地位層は嗜好がより雑食的 (omnivorous) であるのに対し、地位のヒエラルキーの底辺付近の人びとはより単食的 (univorous) である。少なくともアメリカでは、ハイブラウな俗物性がハイブラウな雑食性にとって代わられたというのである。

さらに、ピーターソンは、1982年と1992年のデータで比較分析を行った結果、1982年よりも1992年において、高地位層のあいだで雑食性がいっそう浸透したことを見出した。つまり、高地位層が一般にますます雑食的になっていること、そして高地位にある雑食的な若年コーホートが、俗物的志向をもつ傾向の高い年長コーホートに取って代わりつつある可能性を示したのである (Peterson 2005: 260)。

また同じ時期に、こうしたピーターソンによる一連の文化的オムニボア研究とは別の角度からブルデューの文化的卓越化モデルの相対化を促す貴重な貢献をしたのが、M・ラモンの象徴的境界に関する研究 (Lamont 1992) である。そこでラモンは、フランス社会とアメリカ社会を対象に、アッパーミドルクラスがどのように自己と他者のあいだに象徴的境界を引いているのか——バウンダリーワーク (boundary work) と呼ばれる——について探究している。彼女は、社会経済的境界、文化的境界、道徳的境界の三つ類型を地位の評価基準とし、インタビュー調査に基づいて、それぞれの社会でアッパーミドルクラスがどの基準を重視しているかを明らかにした。ラモンによれば、道徳的境界はアメリカにおいてもフランスにおいても重視されたが、社会経済的境界はアメリカにおいて、文化的境界はフランスにおいて顕著に見られたという (Lamont 1992: 130)。このバウンダリーワークの研究を踏まえてラモンは、道徳的境界がブルデュー理論の盲点の一つになっているだけでなく、これら三つの境界の関係は時間と空間に応じて変化すると指摘し (Lamont 1992: 181)、人びとが地位を評価し、自己と他者ならびに集団間を境界づける際の多様な基準を考慮する必要性を主張している。

いずれも 1990 年代初頭に提出され、ブルデューの文化的卓越化モデルとの差異を強く印象づけることになった、これらの文化的オムニボアやバウンダリーワークの研究成果は、これ以降、ブルデュー社会学の流れを汲む文化的実践の考察に多大な影響を及ぼすことになる⁴⁾。大づかみに言えば、そこで重要な位置を担うことになったのは、文化的正統性の基準の変容に関する問いであり、とりわけブルデューが想定していた絶対的文化資本の自明性に関する問いである。かかる問いの隆盛とともに、文化的実践の研究は、現代社会における絶対的文化資本の働きだけでなく、歴史的・社会的条件に応じた相対的文化資本の検証へと向かっていくことになる。

4. 新興文化資本

こうしたポスト・ブルデューの文化社会学に連なる研究系譜においては、相対的文化資本、言い換えれば現代の文化資本をどのように規定できるのかが議論の鍵を握ってきた。文化的オムニボアの存在ならびに象徴的境界の多元化という条件を踏まえた場合、現代の文化資本をどのように捉えればよいのか。近年では、ブルデューが一つの基準とした絶対的文化資本の役割の低下が経験的に見出されるなかで、従来とは別様の文化資本の解釈が提出されつつあり、それは「新興文化資本 (emerging cultural capital)」と呼ばれている (Priour and Savage 2013, 2014; Savage et al. 2015=2019; Savage et al. 2018)。プリウールと M・サヴィジによれば、この見方が必要とされるのは、「ブルデューが 1960 年代から 1970 年代のフランスで文化資本として機能していることを発見したハイブラウ文化の諸形態が、30~40 年後のフランスならびにその他の国々で同様の社会的認識を享受していないことはまったくもって明らかである」(Priour and Savage 2013: 249) からだ⁵⁾。

この新興文化資本という視座は、上述した文化的オムニボア論⁶⁾や象徴的境界論の意義を踏まえつつ展開された多数の理論的・経験的な研究成果から導き出されてきたものである。現在のところ、その議論の焦点は、特定のハイブラウな文化ジャンルや境界を超え出る実践に向けられ、主に「コスモポリタン (cosmopolitan)」と「物知り顔 (knowingness)」という二つの形態として概念化されつつあるように見える。したがって、ここでは、現代社会において、この二つの形態の新興文化資本がもつ含意について検討していく。

4.1. 新興文化資本としてのコスモポリタン

文化的オムニボア論は、エリート層が象徴的な垣根を超え、文化的雑食性を高めていることを経験的に見出したが、この傾向はしばしば文化的な寛容性や開放性の問題として捉えられてきた。P・クランジョンと Y・ルメルによれば、管理職などのエリート層は、組織や企業のなかで、さまざまな地位集団に所属する人びとと相互作用する機会が多く、かれらの社会的紐帯が多様であるために、コミュニケーションの資源として文化的に雑食化することへの誘因が働いており、このことは、ハイブラウな文化的スノビズムからコスモポリタンな寛容性へと向かう文化的正統性の定義の変容を示唆しているかもしれないという (Coulangeon and Lemel 2007: 108)。したがって、こうした文化的な寛容性や開放性、言い換えればコスモポリタンな嗜好が卓越化とどのように関係しているかが問われてきたのである。

たとえば、D・ウィーニクは、コスモポリタニズムが一つの権力資源であり、社会関係資本や文化資本の一形態として理解されうるとして、これをコスモポリタン資本と呼んでいる (Weenink 2008: 1092)。ウィーニクによれば、コスモポリタン資本とは、①グローバル化する社会的アリーナ (多国

籍企業の管理職などの地位を用意する労働市場や教育市場など)に参加する傾向、②そのようなアリーナに自信をもって参加するのに役立つ身体的・精神的性向 (predispositions) や能力 (ノウハウ) のことである。コスモポリタン資本は、しばらくのあいだ外国で生活すること、異なる国籍の友人を訪問したり受け入れたりとすること、国際会議に頻繁に参加すること、グローバルに分散した友人や親戚を保持すること、グローバルな本や雑誌や新聞を読むこと、英語やその他の言語をネイティブ並みに習得することなどを通じて蓄積され、展開され、表示される。そして、コスモポリタニズムを資本の一形態と見なすことは、社会的再生産や社会階級の問題をもたらすことになる」と述べている。

そこでウィーニクは、オランダでの量的調査と質的調査をもとに、親がコスモポリタニズムをどのように認識し、どのように子どもにコスモポリタン資本を授けようとしているかについて考察している (Weenink 2008: 1100-3)。結果として、ウィーニクは、伝統的な上流階級と結びついた文化資本や社会関係資本の獲得を前提とする国内のアリーナではなく、超国家企業などのより開かれたヨーロッパ規模あるいは世界的規模の社会的アリーナを志向する相対的に低い階級の野心的な親が、子どものコスモポリタン資本形成に投資する傾向が高いと指摘する。これには親の野心と競争のルールが比較的定まっていない新しいアリーナの開放度が関係しており、親が子どもにコスモポリタン資本を授けようとする傾向の背後をなす駆動力は、社会的再生産ではなく社会的上昇移動にあることが示唆されている⁷⁾。

また、クランジョン (Coulangeon 2017) は、フランスの文化的実践に関するデータを用いて多重対応分析 (MCA) を行った結果、文化的特権は、ハイブラウ文化との親和性によって排他的に定義されることがますます少なくなり、外国に結びついた文化的資産や実践 (外国旅行、英語のテレビ番組視聴や読書や音楽鑑賞など) との関連性をますます高めていると指摘する。すなわち、エリートの文化的特権は、ハイブラウ文化への関与と文化的多様性への開放性との組み合わせによってますます定義される傾向にあるということだ。クランジョンによれば、こうした多様性への開放性は、グローバリゼーションによって提供される機会を活用する教育的・経済的資源を所有する人びとにだけ手が届くものである。したがって、この資本は、文化的不平等の衰退と等しいわけでもなければ、文化の民主化と同義であるわけでもない。クランジョンは、経済的・文化的グローバリゼーションが進むなかで、フランスのエリート教育の場における権力バランスの変化 (ビジネススクールの魅力の高まりなど) や文化産業の変容といった構造的変動がコスモポリタンな文化資源を資本の一形態へと変えたのではないかと指摘し、逆説的にも文化的他者性への開放性は、他者からの距離化や卓越化と相容れないわけではないと考察している。

さらに、J・ジョンストンとS・バウマン (Johnston and Baumann 2015=2020) は、アメリカの食文化の領域を対象として、エキゾチックな料理や食べ物に高い価値を付与し実践する料理コスモポリタニズムが、食への意識が高い人びと——フーディー (foodie) と呼ばれる——によって志向される様子を描き出している。ジョンストンとバウマンは、古典的な西洋中心の料理のヒエラルキーを侵犯し、文化的差異や異質性を高く評価しながらエキゾチックな料理までも雑食的に嗜好するフーディーが、高学歴・高収入のエリート層で構成されており、「料理コスモポリタニズムが、世界システムの地政学上の中核にいる人びとを途方もなく特権化された存在にする、権力と資源が著しく不均等に配分された状況のなかで生じている」 (Johnston and Baumann 2015=2020: 187) と指摘する。もちろん、一方で、料理コスモポリタニズムは、既存の文化的ヒエラルキーに立ち向かう民主的な開放性を示唆していると捉えることが可能であるが、他方で、やはりそれは社会階級的な基盤をもち、エリート層との強い結びつきを

保ちながら、一つの文化資本として卓越化に寄与しているのである⁸⁾。

いずれにせよ、これらの研究で共通して示唆されているのは、多様性や異質性への文化的な寛容性や開放性が、現代社会において新興の文化資本としての位置を獲得しつつあることだ。とくに、現代のグローバル化の文脈においては、コスモポリタンな実践が正統性の獲得ならびにそれを通じた文化的卓越化との結びつきを強化し、人びとによる地位獲得の戦略に対する意義を高めているのである。もちろん、ウィーニングが指摘するように、「コスモポリタン資本は、それが活性化される社会的アリーナに応じて多様な形態を取る」のであるが、こうしたコスモポリタンな志向や実践は、グローバル化の進んだ現代社会の文化的卓越化を理解する有意義な視点となり、新興文化資本の一つとして位置づけられつつある。

4.2. 新興文化資本としての物知り顔

文化的境界の侵犯を射程に収めるもう一つの視点は、「物知り顔 (knowingness)」を文化資本の一形態として捉えるものである。この議論においては、ハイブラウ文化／ポピュラー文化と社会階級との関係性の変化を踏まえて、「大衆的な文化的客体が美学化されるにつれ、またエリートのな客体が大衆化されるにつれ、客体化された形態の文化資本は、大部分、身体化された形態の文化資本に取って代わられた」(Holt 1997: 103) という見方が支持される。すなわち、『ディスタンクシオン』では、客体化された文化資本の選好と社会階級とのあいだに対応関係が見出されていたが、現代では、芸術作品などの客体の消費それ自体を弁別的指標とすることが困難になりつつあり、「客体化された形態の文化資本が階級による排他的な境界メカニズムとしての効力を喪失している」(Priour and Savage 2014: 308) と見られるのである。

S・フリードマンは、インタビュー調査に重点を置きながら、イギリスのコメディ場についての分析を行い、とりわけそこに働く身体化された文化資本の意義を明らかにしている (Friedman 2012, 2014)。フリードマンは、イギリスではコメディに伝統的に低い地位が与えられてきたが、今では文化的特権層の若者世代にとってコメディは文化資本を働かせる新興の場になっているという。そしてその際に重要となるのは、「コメディ文化資本 (comic cultural capital)」が、コメディの正統な「対象＝客体 (objects)」への好みによってではなく、コメディ評価の洗練された「無私の」スタイルによってますます表明されるようになってきているということである (Friedman 2014: 4)。

サーベイ調査の結果では、人びとが選好するコメディのアイテムは所有する文化資本量といくらか結びついていたものの、その多くは、高文化資本 (high cultural capital, 以下 HCC)、混合文化資本 (mixed cultural capital, 以下 MCC)、低文化資本 (low cultural capital, 以下 LCC) の人びとのあいだで比較的均等に分布していた。しかし、フリードマンによれば、こうした交差し合う嗜好は必ずしも幅広い雑食性を示しているわけではない。というのも、彼が実施したインタビュー調査では、HCC と LCC の回答者は同じコメディアンへの選好をしばしば表明していたけれども、その理由は大きく異なっていたからである。つまり両者は、同じコメディの対象＝客体を選好しているけれども、異なる仕方でもコメディを解釈し、対照的な評価様式を適用していたということだ (Friedman 2012: 474)。

たとえば、HCC の回答者は、洗練された複雑かつオリジナルなコメディを評価し、感情のスペクトラム全体を打つようなコメディを価値が高いものとする一方、日常的で単調なコメディを切り捨て、笑いや享楽のみを狙ったコメディを拒否する (Friedman 2014: 164-5)。それに対し、LCC の回答者に

とってコメディは、笑いと密接に結びついており、享楽や快樂がもっとも重要である (Friedman 2014: 78-9)。すなわちこれらは、仮にかれらが同じコメディやコメディアンへの好みを示していたとしても、その評価の様式や重点が一致していないことを意味している。したがって、フリードマンは、コメディのアイテムといった客体化された文化資本ではなく、身体化された文化資本が文化的卓越化の資源になっていると指摘する。

驚くべきことに、私は、HCC の回答者の評価スタイルが、彼らの優れた身体化された文化資本の蓄積を強く前景化していることを発見した。こうしたコメディのスタイルを資本へと転換する主要なメカニズムは (知覚された) 希少性である。たとえば、HCC の回答者は、たいていの場合、特権化された文化的社会化に根ざしているために、文化資本の乏しい人びとには手の届かない類いまれな美的性向を物知り顔で (knowingly) 駆使したのである。(Friedman 2014: 164)

かくしてフリードマンは、嗜好 (taste) は、何が好きか (= what) ではなく、なぜそれが好きか (= why) に関わるものになるという (Friedman 2014: 67)。HCC の回答者は、ハビトゥスに根ざした鑑識眼を介してほとんどいかなる対象も抜け目なく美学化し、横断的なコメディの選好を示しているのである。ただし、フリードマンは、コメディ場では、このように文化的特権層が他の集団からの卓越化や距離化を図る際、依然としてブルデューのいう無私や無償の美的性向が力を発揮しているものの、道徳的基準や政治的基準や感情的基準も象徴的境界の形成に寄与していると述べ、ラモンの主張に賛同している (Friedman 2014: 171)。したがって、フリードマンによれば、卓越化のための通貨は、適切なコメディの選択ではなく、良いユーモアのセンス (good sense of humour) を磨くことであり、従来のブルデューの文化資本概念が全面的に妥当するわけではないと指摘したのである。

文化的雑食性の高まりを受け止めながらも、それを文化資本の働きの衰退ではなく、新たな形態の文化的卓越化の台頭として把握するのが、かかる「物知り顔」という見方である。プリウールとサヴィジによれば、この言葉を用いるのは、それが「一種の自己再帰的な文化領有としてより適切に理論化されるもの」であり、「結局は差別化するような仕方ですさまざまな文化形態を横断する自己意識的な能力を把握する」ことができるからである (Prieur and Savage 2013: 256)。

たとえば、サヴィジら (Savage et al. 2015=2019) は、インタビュー調査を踏まえて、幅広い文化活動への関心を語る裕福で高学歴の人びとは、とくにポピュラー文化に言及する際、こうした文化活動への関わりについて卓越的に物知り顔を示したと指摘する。これらのポピュラー文化の領域に対する好みは、複雑かつ識別的であり、必ずしも文化的開放性の表れであるとは言えない。考慮に入れなければならないのは、ポピュラー文化が好きだということそれ自体ではなく、さまざまな選択肢から巧みに選り出す技量を証明している点であり、ポピュラー・アーティストを注意深く選別している点である。したがって、かれらは、どのような芸術形態や文化活動の境界も超え出ていき、何でも受け入れるかもしれないが、異なる嗜好を発揮して、それが楽しめる理由を説明できなければならない。ここで肝心なことは、かれらが選好し評価するポピュラー文化が何なのかではなく、それを表明する様態の類似性であり、特定の美的評価のスタイル、つまり折衷的な知識と特権的な解釈の両方を示すような、ポピュラー文化に対して一定の距離を取る物知り顔の志向性なのである (Savage et al. 2015: 114-8=2019: 105-10)。

これらの研究もまた、一様に、現代の雑食的・横断的な文化的嗜好の存在意義を考慮に入れつつも、

それが必ずしも卓越化の不在や文化の民主化へとつながるわけではないと主張している⁹⁾。文化的な財や対象やジャンルへの好みは多様化し、これまで想定されてきた明確な象徴的境界を文化的客体のあいだに見出すことは困難になりつつある。言い換えれば、ブルデューがしばしば想定していたように、客体化された文化資本と身体化された文化資本が文化的正統性の点で一致するものとして把握することがますます難しくなっているということであろう。むしろこれらの研究は、客体化された文化資本よりも身体化された文化資本が卓越化においていっそう重要性を増していると考え、現代においては、この物知り顔の文化領有がその理解の鍵を握っていると解釈して、それを新興文化資本の一つとして位置づけているのである。

5. おわりに——文化資本概念の変容から見た現代の文化的実践

以上のように、ブルデューの文化資本概念を考察したのち、文化的オムニボア論を中心としたそれに対する批判や問題提起の確認を経て、近年の欧米で展開されているポスト・ブルデューの文化社会学の研究成果を踏まえて提出された新興文化資本に関する議論をいくつか概観してきた。そこで新興文化資本は、雑食的で境界横断的な文化的実践をもちや見過ごすことのできないものとして真摯に受け止め、ハイブラウな正統文化を基点としたブルデューの文化資本理解（絶対的文化資本）の妥当性を問い直しつつも、やはり現代社会に依然として見出される文化的卓越化や不平等を把握する視点として提出されたものである。プリウールとサヴィジの言葉を借りれば、その要点は、次のように整理できる。「文化消費における階級的不平等は深刻なままである。しかし、それはその形態を変化させてきた。というのも、今日の上流階級が往年のハイブラウ文化を誇示すれば、かれらは『現実離れした』旧弊な人としてしるしづけられることになるからだ。むしろかれらは、文化的実践においていっそう幅広い鑑識眼をもっており、この能力が現代の文化資本のしるしなのである」(Priour and Savage: 2013: 262)。『ディスタクシオン』以後の欧米の文化資本概念をめぐる理論的・経験的研究の系譜をたどりなおすことで見えてくるのは、ブルデューの示した文化的卓越化モデルがすでに一定の限界を抱えているという認識であり、本稿で示したコスモポリタンと物知り顔という二つの形態の新興文化資本は、こうした現代の文化的な民主化と卓越化が同時に働く状況を射程に収める見方として導き出されてきたといえるのである¹⁰⁾。

最後に、新興文化資本の台頭を導いた社会的条件を考察することで、改めて文化的卓越化の探究に対するその現代的な含意を確認しておこう。

フリードマンらによれば、現代において新興文化資本がその意義を高めた背景には、次のような理由があるという (Friedman et al. 2015: 3)。一つ目は、文化的な嗜好と活動の構造化に年齢や世代による分断が目立ってきていること、二つ目は、幅広く共有された正統性を求めて争う分散的な文化評価の様式が身体化されていること、三つ目は、とくに若年層のあいだで、エリート文化それ自体が再編されつつあること、である。すなわちこれらが意味するのは、ハイブラウ文化がブルデューの示したような卓越化の基準になっているのは比較的年長層のあいだであり、若年層のあいだでは新興文化資本を通じた卓越化が台頭しているということである。若年層のあいだでは、従来の文化的客体のヒエラルキーを横断するコスモポリタンな嗜好や物知り顔の文化領有が浸透しており、それらが他者からの差異化を図る重要な鍵を握っている。

また同時に、そこには文化的条件それ自体の変容が関係している。本稿で示したように、ヨーロッパ社会でさえ、ハイブラウ文化やハイカルチャーが文化的な正統化や卓越化と一義的に結びつかなくなっていること、そして従来において前提とされてきた文化的客体のヒエラルキーがいつそう曖昧化していることが経験的に見出されている。すなわちそれは、既存の文化領域や文化ジャンルや文化的客体の選好そのものを文化的正統性のしるしとして排他的に理解することがより困難になっているということでもある。現代では外国文化やデジタル文化が目覚ましく浸透し、文化産業がグローバル化し情報化し多元化するなかで、ハイブラウ文化とポピュラー文化の区分や対立関係（それぞれの内部でのそれも含め）が不明瞭となり、それらのあいだの文化的序列もかつての自明性を失いつつある。上述したように、現代においてそれは、とくに若者層のあいだで顕著となり、客体化された文化資本と身体化された文化資本の乖離として現象しているともいえる。文化的卓越化の研究において、後者のようなハビトゥスを通じた意味世界の詳細な探究が意義を高めているのは、こうした文化的条件の歴史的な変容と大きく結びついていると考えられる¹¹⁾。

しかしながら、いずれにしても、やはりブルデュー社会学に対する批判的な検討は欠かせないとはいえ、現代社会においても文化資本ならびに文化的卓越化という視座は、決してその意義を喪失しているわけではない。本稿で考察した新興文化資本という視座は、文化ジャンルや境界が相互浸透したなかで繰り広げられる、現代の複雑な文化的卓越化の様相へと迫る一つの方途を示しているのである。

注

- 1) ここでブルデューが想定しているのは、G・ベッカーの「人的資本 (human capital)」論である。
- 2) 同様に、別のところではこう述べている。「たとえば私が1960年代初頭に提案した文化資本の概念は、経済力を示す変数の与える影響を除外してみてもなお、より文化水準の高い家庭出身の学生が高い比率で学校での成功を収めるだけでなく、あらゆる範囲の分野で異なった様式やパターンの消費や文化的表現を示す、という事実を説明するためのものでした」(Bourdieu and Wacquant 1992=2007: 207-8)。
- 3) この点について、ブルデューは次のように述べている。「経済資本の概念について私が長々と説明すべきではないでしょう。私は文化資本の特殊性を分析してきました」(Bourdieu and Wacquant 1992=2007: 158)。
- 4) 文化的オムニボア論の問題提起を受けてグローバルに展開したこうした研究の近年の動向は、Coulangeon et Duval (2013) や Hanquinet and Savage (2016) に収められたいくつかの論考で確認できる。また、日本における文化的オムニボア研究としては、片岡 (2000) が代表的である。
- 5) 『ディスタンクシオン』をめぐる近年のフランスの研究動向については、Coulangeon (2016) を参照。
- 6) すでに文化的オムニボア研究の蓄積も相当にあると言えるが、その点について、ベネットとE・シルヴァは、近年の研究を踏まえれば、文化的オムニボアは、ユニボアと単純な対立関係に立つ一つのオムニボアではなく、複数化される必要があるだろうと述べている (Bennett and Silva 2011: 433)。本稿は、文化的オムニボア研究それ自体を検討することを目的としていないため、それがブルデューの文化社会学にもたらした含意に限定した言及に留まる。
- 7) 他にも、コスモポリタニズムを文化資本と捉えるものとして、Igarashi and Saito (2014) がある。
- 8) ブルデュー社会学の視座から食の領域における卓越化の問題を検討したものとしては、村井 (2015) を参照。
- 9) なお、フリードマンは、文化的ヒエラルキーの両極にあるコメディを混合的に嗜好するMCCの所有者を、社会移動、すなわち軌道の効果によるものと捉え、文化的オムニボア論で示される雑食性それ自体を文化資本と見なし、民主的構えを取る戦略として解釈する見方に異議を唱えている。そこでフリードマンは、MCCの所有者を、文化的オムニボアではなく、文化的家郷喪失者 (cultural homeless) として把握する。というのも、かれらは、HCCあるいはLCCの支配的な環境のどちらにおいても、コメディの嗜好を伝えたり表明したりする際に自信がもてず、不安や心配が後に残って落ち着かないために悩ましい思いをするとして述べていたからである。か

くしてフリードマンは、文化的雑食化の肯定的含意だけではなく、否定的含意についても検討する余地があると指摘している (Friedman 2012; 2014: 171-2)。また、これらはハビトゥス概念の問題として捉えることも可能である (Lahire 2004; Silva 2014; Friedman 2016)。

- 10) たとえば、プリウールらは、こうした知見は、「再帰的近代化論と必ずしも矛盾しない」し、「ブルデューの分析アプローチは、再帰的近代化論者たちが前進させた現代の社会的亀裂についての見方を経験的に裏づけようとする際の有効な道具になるかもしれない」と述べてもいる (Prieur et al. 2008: 68)。
- 11) フリードマンらは、「量的研究それ自体は、通常、文化的客体が文化資本として聖別化される過程を十分に解きほぐすことのできる具体的な問いや物語的記述を欠く」(Friedman et al. 2015: 4) と述べ、新興文化資本の問題は文化資本研究の方法論的問題にも及んでいるという。この点、フリードマンは、別のところでも、特定の空洞化した文化の「客体」への嗜好を量的に研究することだけに集中するのをやめる必要があると提起している (Friedman 2014: 170)。近年の文化資本研究における混合研究法 (mixed methods) の増加は、こうした背景によるものと考えられる。

参考文献

- Bennett, Tony, Mike Savage, Elizabeth Silva, Alan Warde, Modesto Gayo-Cal and David Wright, 2009, *Culture, Class, Distinction*, Routledge. (磯直樹/香川めい/森田次朗/知念渉/相澤真一訳, 2017, 『文化・階級・卓越化』青弓社.)
- Bennett, Tony and Elizabeth Silva 2011, "Introduction: Cultural Capital—Histories, Limits, Prospects," *Poetics*, 39(6): 427-43.
- Bourdieu, Pierre, 1979a, *La Distinction: critique sociale du jugement*, Minuit. (石井洋二郎訳, 1990, 『ディスタクシオン——社会的判断力批判 I・II』藤原書店.)
- , 1979b, "Les trois états du capital culturel," *Actes de la recherche en sciences sociales*, 30: 3-6. (福井憲彦訳, 1986, 「文化資本の三つの姿」『Actes 1』日本エディタースクール出版部: 18-28.)
- , 1986, "The Forms of Capital", John Richardson ed. *Handbook of Theory and Research for the Sociology of Education*, Greenwood Press: 241-58.
- Bourdieu, Pierre. et Jean-Claude Passeron, 1964, *Les Héritiers: les étudiants et la culture*, Minuit. (石井洋二郎監訳, 1997, 『遺産相続者たち——学生と文化』藤原書店.)
- , 1970, *La Reproduction: éléments pour une théorie du system d'enseignement*, Minuit. (宮島喬訳, 1991, 『再生産——教育・社会・文化』藤原書店.)
- Bourdieu, Pierre and Loïc J D Wacquant, 1992, *An Invitation to Reflexive Sociology*, The University of Chicago Press. / *Réponses: pour une anthropologie réflexive*, Seuil. (水島和則訳, 2007, 『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待——ブルデュー, 社会学を語る』藤原書店.)
- Coulangéon, Philippe, 2016, "The Sociology of Cultural Participation in France Thirty Years after *Distinction*," Coulangéon, Philippe and Julien Duval eds, *Routledge International Handbook of the Sociology of Art and Culture*. Routledge: 26-37.
- Coulangéon, Philippe, 2017, "Cultural Openness as an Emerging Form of Cultural Capital in Contemporary France," *Cultural Sociology*, 11(2): 145-64.
- Coulangéon, Philippe and Lemel Yannick, 2007, "Is 'Distinction' Really Outdated? Questioning the Meaning of Omnivorization of Musical Taste in Contemporary France," *Poetics*, 35(2-3): 93-111.
- Coulangéon, Philippe. et Julien Duval, 2013, *Trente ans après La Distinction de Pierre Bourdieu*, La Découverte.
- Friedman, Sam, 2012, "Cultural Omnivores or Culturally Homeless?: Exploring the Shifting Cultural Identities of the Upwardly Mobile," *Poetics*, 40: 467-489.
- , 2014, *Comedy and Distinction: The Cultural Currency of a 'Good' Sense of Humour*, Routledge.
- , 2016, "Habitus Clivé and the Emotional Imprint of Social Mobility," *The Sociological Review*, 64 (1): 129-47.
- Friedman, Sam, Mike Savage, Laurie Hanquinet, and Andrew Miles, 2015, "Cultural Sociology and New Forms of Distinction," *Poetics*, 53: 1-8.

- Hanquinet, Laurie and Mike Savage, 2016, *Routledge International Handbook of the Sociology of Art and Culture*, Routledge.
- Holt, Douglas. B, 1997, "Distinction in America?: Recovering Bourdieu's Theory of Tastes from Its Critics," *Poetics*, 25: 93-120.
- Igarashi, Hiroki and Hiro Saito, 2014, "Cosmopolitanism as Cultural Capital: Exploring the Intersection of Globalization, Education and Stratification," *Cultural Sociology*, 8(3): 222-39.
- Johnston, Josée and Shyon Baumann, 2015, *Foodies: Democracy and Distinction in the Gourmet Foodscape (Second Edition)*, Routledge. (村井重樹・塚田修一・片岡栄美・宮下阿子訳, 2020, 『フーディー——グルメフードスケープにおける民主主義と卓越化』 青弓社.)
- 片岡栄美, 2000, 「文化的寛容性と象徴的境界——現代の文化資本と階層再生産」 今田高俊編, 『日本の階層システム 5 社会階層のポストモダン』 東京大学出版会: 181-220.
- Lahire, Bernard, 2004, *La Culture des individus: dissonances culturelles et distinction de soi*, La Découverte.
- Lamont, Michèle, 1992, *Money, Morals, Manners: The Culture of the French and American Upper-Middle Class*, University of Chicago Press.
- 村井重樹, 2010, 「諸個人のハビトウス——複数の諸性向と文化的実践の諸相」『年報社会学論集』 23: 176-87.
- , 2012, 「ハビトウス論の現代的課題——集団から個人へ, あるいは統一性から多元性へ」『哲学』 128: 87-108.
- , 2015, 「食の実践と卓越化——ブルデュー社会学の視座とその展開」『三田社会学』 15: 124-137.
- Peterson, Richard A, 1992, "Understanding Audience Segmentation: From Elite and Mass to Omnivore and Univore," *Poetics*, 21: 243-58.
- , 2005, "Problems in Comparative Research: The Example of Omnivorousness," *Poetics*, 33: 257-82.
- Peterson, Richard A and Albert Simkus, 1992, "How Musical Tastes Mark Occupational Status Groups," Lamont, Michèle and Marcel Fournier eds, *Cultivating Differences: Symbolic Boundaries and the Making of Inequality*. The University of Chicago Press: 152-186.
- Peterson, Richard A and Roger M Kern, 1996, "Changing Highbrow Taste: From Snob to Omnivore," *American Sociological Review*, 61: 900-7.
- Prieur, Annick, Lennart Rosenlund, Jakob Skjøtt-Larsen, 2008, "Cultural Capital Today: A Case Study from Denmark," *Poetics*, 36(1): 45-71.
- Prieur, Annick and Mike Savage, 2011, "Updating Cultural Capital Theory: A Discussion Based on Studies in Denmark and in Britain," *Poetics*, 39(6): 566-80
- , 2013, "Emerging Forms of Cultural Capital," *European Societies*, 15(2): 246-67.
- , 2014, "On 'Knowingness', Cosmopolitanism and Busyness as Emerging Forms of Cultural Capital," Coulangeon, Philippe and Julien Duval eds, *The Routledge Companion to Bourdieu's 'Distinction.'* Routledge. 307-18.
- Savage, Mike, Niall Cunningham, Fiona Devine, Sam Friedman, Daniel Laurison, Lisa McKenzie, Andrew Miles, Helene Snee and Paul Wakeling, 2015, *Social Class in the 21st Century*, Penguin Books (船山むつみ訳, 2019, 『7つの階級英国階級調査報告』 東洋経済新報社.)
- Savage, Mike, Laurie Hanquinet, Niall Cunningham and Johs Hjelbrekke, 2018, "Emerging Cultural Capital in the City: Profiling London and Brussels," *International Journal of Urban and Regional Research*, 42(1): 138-49.
- Silva, Elizabeth., 2016, Unity and Fragmentation of the Habitus, *The Sociological Review*, 64(1): 166-83.
- Weenink, Don, 2008, "Cosmopolitanism as a Form of Capital: Parents Preparing their Children for a Globalizing World," *Sociology*, 42(6): 1089-106.